粟田遺跡（第１６次調査）

２００９

津田駒工業株式会社
石川県野々市町教育委員会

粟田遺跡（第１６次調査）

２００９

津田駒工業株式会社
石川県野々市町教育委員会

調査区南側全景（南西から）

調査区北側全景（東から）

例　言

1　本書は、粟田遺跡（第16次）埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　遺跡の所在地は、石川県石川郡野々市町粟田地内である。
3　調査原因は津田駒工業株式会社野々市工場増築に係るものである。
4　調査にかかる費用は、津田駒工業株式会社が負担した。
5　調査は、津田駒工業株式会社からの依頼を受けて野々市町教育委員会が実施した。
6　現地調査は、平成19年度に実施した。遺跡名・面積・期間・担当者は下記のとおりである。

遺跡名　粟田遺跡（第16次）
期　間　平成19年４月16日～平成19年12月18日
面　積　6,026㎡
担当者　永野勝章　野々市町教育委員会文化課　主査

7　出土品整理は平成20年度に野々市町教育委員会が実施した。
8　報告書の刊行は平成20年度に野々市町教育委員会文化振興課が実施した。編集・執筆は永野勝章（野々市町教育委員会文化振興課　主査）が行った。
9　本書についての凡例は下記のとおりである。
(1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
(2) 水平基準は海抜高であり、T．P．（東京湾平均海面標高）による。
(3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真で対応する。
(4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
10　調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保管・管理している。

目　次

第１章　経過 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 2
　第３節　整理作業の経過 …… 2
　第４節　調査体制 …… 2
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 6
　第１節　調査の方法 …… 6
　第２節　基本層序 …… 6
　第３節　遺構 …… 6
　第４節　遺物 …… 10
第４章　総括 …… 11
遺物観察表 …… 13
図版図版　遺構・遺物実測図 …… 14

挿図目次

第1図　調査区位置図 …… 1
第2図　遺跡の位置 …… 3
第3図　野々市町の遺跡 …… 5
第4図　グリッド図（1/300） …… 14
第5図　全体平面図（1/300） …… 15
第6図　平面図（1）（1/120） …… 16
第7図　平面図（2）（1/120） …… 17
第8図　平面図（3）（1/120） …… 18
第9図　平面図（4）（1/120） …… 19
第10図　平面図（5）（1/120） …… 20
第11図　平面図（6）（1/120） …… 21
第12図　平面図（7）（1/120） …… 22
第13図　平面図（8）（1/120） …… 23
第14図　平面図（9）（1/120） …… 24
第15図　平面図（10）（1/120） …… 25
第16図　南側壁面土層断面図（1/20） …… 26
第17図　遺構実測図1・4号竪穴建物（1）（1/40） …… 27
第18図　遺構実測図1・4号竪穴建物（2）（1/40） …… 28
第19図　遺構実測図2号竪穴建物（1/40） …… 29
第20図　遺構実測図3・5号竪穴建物（1/40） …… 30
第21図　遺構実測図6号竪穴建物（1）（1/40） …… 31
第22図　遺構実測図6号竪穴建物（2）（1/40） …… 32
第23図　遺構実測図7・8号竪穴建物（1/40） …… 33
第24図　遺構実測図1・3号掘立柱建物（1/60） …… 34
第25図　遺構実測図2号掘立柱建物（1/60） …… 35
第26図　遺構実測図4・5号掘立柱建物（1/60） …… 36
第27図　遺構実測図土坑2081・2102・2103・2956（1/40） …… 37
第28図　遺構実測図ピット1372・2137・2549・3082（1/40） …… 38
第29図　遺構実測図道路状遺構・溝2571・2957（1/300・1/80） …… 39
第30図　遺構実測図平行溝群A・B（1/200・1/40） …… 40
第31図　遺物実測図（1）（1/3） …… 41
第32図　遺物実測図（2）（1/3） …… 42
第33図　遺物実測図（3）（1/3） …… 43
第34図　遺物実測図（4）（1/3） …… 44
第35図　遺物実測図（5）（1/3） …… 45
第36図　遺物実測図（6）（1/3） …… 46
第37図　遺物実測図（7）（1/3） …… 47

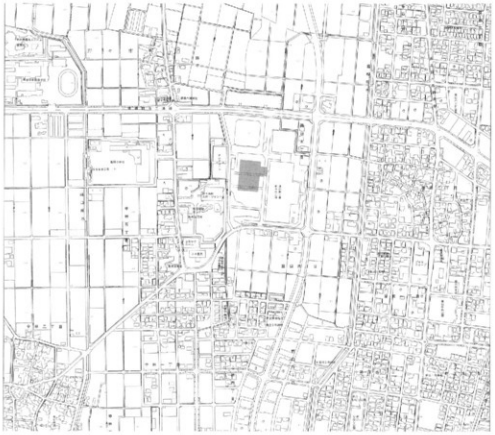
第1章　経　過

第1節　調査の経過

栗田遺跡は昭和63年の旧農業試験場跡地の造成整備事業にかかる埋蔵文化財分布調査（石川県立埋蔵文化財センター実施）によって発見された遺跡である。津田駒工業株式会社（以下、津田駒工業）が工場を建設することとなり、平成元・2年に石川県立埋蔵文化財センターと野々市町教育委員会（以下、町教育委員会）によって工場部分等を対象に発掘調査が行われた。

平成17年6月、津田駒工業から町教育委員会に、同社敷地内において将来的に工場を増築する際の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて問い合わせがあった。津田駒工業と町教育委員会は対象地内で試掘確認調査を実施することとし、6月20日津田駒工業より町教育委員会にあてて試掘調査の依頼がなされた。これを受け町教育委員会は6月23日試掘調査を実施し、ほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地であることを確認し、工場増築の際には町教育委員会と協議する旨を回答した。

平成18年8月、津田駒工業から工場の増築を行いたいとの連絡があった。計画では工場増築部分全域の埋蔵文化財が影響を受けるため、双方協議の結果、平成19年度に工場増築部分約6,000㎡の発掘調査を行い、平成20年度に出土遺物の整理と報告書の刊行を行うことで合意し、12月15日に協定書を締結した。12月19日に津田駒工業から文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、町教育委員会はこれに発掘調査を行う旨の意見を付して石川県教育委員会に進達した。12月28日石川県教育委員会より発掘調査を実施する旨の通知があった。平成19年4月2日、津田駒工業より発掘調査依頼が出され、同日津田駒工業と町教育委員会の間で埋蔵文化財発掘調査の契約が締結された。



第1図　調査区位置図

第２節　発掘作業の経過

今次調査は東隣で操業中の工場に支障を来たさないように、北・南・東の３つの調査区に分けて順に調査を行った。

４月16日　北側調査区の表土除去を開始する。
５月８日　作業員による調査開始。
６月11日　２号竪穴建物掘削。
６月18日　１号竪穴建物掘削。
７月23日　野々市中学校２年生５名、職場体験　７月26日まで
８月３日　第１回の航測を行うも、強風のため途中で中止する。
８月５日　再び航測を実施。今回は天候もよく無事終了する。
８月７日　南側調査区表土除去開始。
９月５日　作業員による調査開始。
10月２日　５号掘立柱建物掘削。
10月５日　６号竪穴建物掘削。
11月７日　第２回航測。
11月12日　東側調査区の表土除去を開始。
11月19日　作業員による調査開始。
12月７日　道路状遺構掘削。
12月12日　第３回航測。
12月18日　機材整理・搬出。発掘調査を終了する。

第３節　整理作業の経過

平成20年４月15日、津田駒工業と町教育委員会は前年度に行った発掘調査の出土遺物整理と報告書刊行の契約を締結した。遺物整理は４月から11月まで実施した。その後図版作成、遺物写真撮影、原稿執筆等報告書作成作業を行った。

第４節　調査体制

調査主体　野々市町教育委員会（教育長　田中　宣：平成20年３月30日まで）
（教育長　村上雄喜：平成20年３月31日から）
担当課　野々市町教育委員会　文化振興課（課長　西本　正明）
調査期間　平成19年４月16日～同年12月18日
対象面積　6,026㎡
調査担当：永野勝章
整理・報告書作成作業
担　当　永野勝章
竹田倫子・野村祥子（野々市町教育委員会　臨時職員）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

野々市町は、石川県のほぼ中央に位置する。北東は金沢市、南西は白山市に隣接している。町の規模は東西約4.5km、南北6.7km、面積13.56㎢である。本書で報告する栗田遺跡は野々市町の南部にあたる栗田地区に所在する。このあたりは標高36m手取扇状地扇央部に立地し、現況は宅地・商業地と水田が広がる平坦な地形であるが、これは近代初頭に行なわれた耕地整理と近現代の土地開発によるもので、それ以前は手取川とその支流によって形成された細長い島状の微高地が点在し、その微高地上に集落が展開してきたことが近年の発掘調査から明らかになってきている。

第2図　遺跡の位置

第２節　歴史的環境

野々市町における最も古い遺跡は、縄文時代後期前葉後半にあたる押野大塚遺跡である。後期中葉前半以降になると、扇状地扇端部の湧水地帯では御経塚遺跡や金沢市チカモリ遺跡、米泉遺跡などの集落遺跡が形成される。一方、扇央部付近では、野々市町南部・中南部の各遺跡や富樫館跡ノダ地区・清金アガトウ遺跡などから少量の土器や打製石斧を出土する明確な居住施設を伴わない、短期的な土地利用の痕跡が確認されている。栗田遺跡や三納アラミヤ遺跡では打製石斧や円礫を母岩、石器製作に伴うと見られる剥片が確認されており、打製石斧の素材採取地や石器製作地と考えられている。

こうした扇端部の湧水地帯における集落と、その周辺部での短期的な活動痕跡という遺跡群の立地と性格の結びつきは、縄文時代晩期頃まで継続する。

弥生時代前～中期では、野々市町を含む手取扇状地では、押野大塚遺跡や御経塚シンデン遺跡、御経塚遺跡ツカダ地区、栗田遺跡、上林遺跡など、土器片が少量散布する遺跡が知られるのみとなる。一方で白山市八田中遺跡や金沢市矢木ジワリ遺跡など土坑群や定量の遺物が出土する遺跡が見られるようになるが、散発的な様相である。

弥生時代後期になると鉄器の普及による生産力の向上から人口が増加し、河川に挟まれた微高地に立地する集落が爆発的に増加し、高橋川・伏見川流域で、押野ウマワタリ遺跡・押野タチナカ遺跡・横川・木町遺跡・高橋セボネ遺跡・扇ヶ丘ゴショ遺跡、十人川・馬場川流域では、御経塚遺跡ツカダ地区・御経塚遺跡デト地区・御経塚オッソ遺跡・二日市イシバチ遺跡・長池ニシタンボ遺跡などの遺跡が現れる。

古墳時代前期に入ると、遺跡数は減少する傾向を見せる。手取扇状地周辺では、扇端部付近の標高10メートル付近のラインにほぼ沿うように遺跡が並ぶ傾向にある。御経塚シンデン遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭の集落と古墳時代前期の墓域が検出される遺跡であり、扇端部では該期の中心的な遺跡である。また同時期の集落として扇央部では小規模ながら竪穴建物が検出された上新庄ニシウラ遺跡が知られている。後に、御経塚シンデン遺跡では古墳時代前期の前方後方墳・方墳

からなる古墳群の墳丘を破壊して、古墳時代後期の集落が形成されている。一方、扇央部では上林古墳や白山市田地古墳など横穴式石室を伴う後期古墳が点在することが知られているが、築造主体となる集落が確認されておらず、野々市町南部における古墳時代集落の様相は明らかではない。

古代は、栗田遺跡・清金アガトウ遺跡など扇状地扇央部の集落の多くが開始され、扇央部の開発が進んだ時期である。なかでも扇状地開発のモニュメントとも言われる末松廃寺は、法起寺式伽藍配置で7世紀後半に創建、8世紀初頭まで存続したとされる。周辺では末松福正寺遺跡、末松ダイカン遺跡など7世紀前半代の集落跡も確認されているが、遺跡数が増えるのは7世紀後半からであり、8世紀になると栗田遺跡の南に位置する上林・新庄遺跡群で集落が拡大する。この上林・新庄遺跡群は北と南でその様相を異にし、南は製鉄にかかわる竪穴住居と掘立柱建物から成る手工業生産地区、北は溝に区画された計画的な建物配置やその後9世紀後半にかけて機能する大型建物を有し周辺を掌握する領主層が存在した地区であったことが窺える。

中世は、野々市町東部には扇が丘ハワイゴク遺跡・扇ヶ丘ゴショ遺跡など居館クラスの遺跡が検出されており、林氏などの有力武士の居宅と考えられている。野々市町住吉町と扇ヶ丘地内には加賀の守護であった富樫氏の屋敷と考えられる富樫館跡が存在する。館の性格を明示できるような成果は上がっていないが、守護城下町の構造に関連づけられる都市構造の一端が判明しつつある。野々市町中南部では13世紀から三納ニシヨサ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡などの集落跡が確認されている。これらは輸入磁器を一定量所持し、集落内には小規模な掘立柱建物を配置するもので、その実態は自作農的な小領主と考えられる。

中世後半では、野々市町北部では三日市A遺跡・長池キタノハシ遺跡などから、野々市町南部では栗田遺跡の一角からそれぞれ近年の調査で集落跡が確認されている。

近世でも栗田の集落は確認されるが『石川郡誌』には、鎮守神社の西側にあった村を、栗田川の氾濫のため村全部を栗田新保に移した、という伝承が書き留められおり、その後は水田等耕作地として利用されていたようである。

近現代は、大正時代にこのあたりの耕地整理が終了して再び水田となり、昭和37年（1962年）から61年までは石川県農業試験場がこの地に設置され、農業研究の拠点として利用されていた。

文献　野々市町　2003　『野々市町史』資料編
　　野々市町　2006　『野々市町史』通史編

No.	遺跡名	時　期	No.	遺跡名	時　期
1	栗田遺跡	縄文・古代・中世・近世	29	御内前遺跡	縄文・中世・近世
2	二納アラミヤ遺跡	縄文・古代・中世・近世・近代	30	田中ノ下遺跡	弥生・古墳
3	二納トヘイダゴシ遺跡	縄文・中世・近世	31	貴布祢ヤブ遺跡	中世・近世
4	扇ヶ丘ハワイゴク遺跡	中世	32	富樫館跡	縄文・中世・近世
5	二納ニシヨサ遺跡	中世	33	郡ガロヤブラダ遺跡	古代・中世
6	下新保アラヤ遺跡	古代	34	郡ガロハワイヴラ遺跡	縄文・弥生・古代・中世
7	下新保アラダノ遺跡	古代	35	郡ガロコショ遺跡	弥生・古代・中世
8	上林古墳	古墳	36	高橋ウバガク遺跡	弥生
9	上林前ボ遺跡	古代・中世	37	山田遺跡	縄文・中世
10	上新庄ニシクラ遺跡	弥生・古墳・古代	38	堂西セボ遺跡	弥生・古代
11	七林マダ遺跡	古代	39	横出末町遺跡	弥生・中世
12	下林遺跡	弥生・古代	40	押野ヤマダノ遺跡	弥生・中世
13	宮裏寺遺跡	弥生・古代	41	押野タケテカ遺跡・押野館跡	縄文・弥生・中世
14	清金アガトウ遺跡	縄文・古代・中世	42	押野大坂遺跡	縄文・弥生
15	末松C遺跡	縄文・古代・中世	43	上安原遺跡	中世
16	末松堰遺跡群	古代・中世	44	堂代遺跡	縄文
17	末松D遺跡	古代	45	三日市ヒガシタンが遺跡	弥生・古墳・古代・中世
18	末松福正寺遺跡・北平遺跡	古代	46	三日市A遺跡	縄文・弥生・古代・中世・近世
19	末松ダイカン遺跡	古代	47	三日ガシバ遺跡	縄文・弥生・中世・近世
20	末松堅下林	弥生・古代・中世・近世	48	鳴ナボケ遺跡	古代・中世
21	辻の堂遺跡	不詳	49	徳用ヤマダノ遺跡	古代・中世
22	末松C遺跡	古代	50	長池キタノハシ遺跡	弥生・中世・近世
23	末松立情	古墳	51	長池ニシタンボ遺跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世
24	末松しりから遺跡	古代・近世	52	御経塚ヤブ遺跡	弥生・古墳
25	法恩寺跡	不詳	53	御経塚遺跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
26	末松堅跡	不詳	54	御経塚経塚	中近世
27	大垣館跡	古代・中世	55	御経塚シンデン跡跡・古墳群	弥生・古墳・中世・近世
28	三林館跡	中世			

野々市町の遺跡

第３図　野々市町の遺跡（1/30,000）

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

今次調査は前述のように北・南・東の３つの調査区に分割して調査を実施した。調査区ごとに遺構面までの土砂を重機によって除去し、公共座標に基づく10×10mのグリッドを設定した。グリッド番号は南北方向には数字を、東西方向にはアルファベットを割り振り、北西隅のグリッド番号でその区画を呼称した。グリッド設定と同時に人力による調査を開始し、遺構検出、1／100の遺構分布図を作成した。個々の遺構の名称は時代・種類・グリッドに関係なく１から通しで調査番号を付けている。遺構掘削は、基本的に遺構を半裁して断面の観察を行って土色や堆積状況を観察し、必要に応じて写真や図面による記録保存を行った。遺跡全体の測量は株式会社北日本ジオグラフィーに委託して空中写真測量を実施した。

整理作業は野々市町御経塚にある野々市町ふるさと歴史館内の調査整理室において、出土遺物の洗浄、出土地点等の注記、復元、主要遺物の実測図作成、遺物・遺構実測図のトレースの順で行った。遺物の総数は、バンケースで、11箱である。

報告書について遺構の説明は本文・図面図版・写真図版を用いる。遺構の種類には竪穴建物・掘立柱建物・土坑・ピット・道路状遺構・溝・平行溝群などがあり、これらについて位置・分類・規模・形状・覆土の堆積状況・出土遺物・重複とその前後関係などを記述した。遺物の記述は、本文・観察表・図面図版・写真図版でおこなった。遺物の報告番号は１から付与し、本文・観察表・図面図版・写真図版で共通する。

観察表は遺物の種類によって観察項目は異なるが、煩雑を避けるため表は統一の形式を取り、そのつど、外面色調：外、内面色調：内、釉色もしくは釉の種類：釉、と付して区別した。遺物図版作成にあたっては出土遺構毎にレイアウトしている。遺物図版の縮尺は原則１／３とし、石製品など大型のものは１／６で掲載した。

第２節　基本層序

今次調査区の基本的な層序は第16図のとおりである。現在の地表から１．盛土層、２・３．耕作土層、４．旧耕作土層、５・６・７・８は灰色～灰褐色土層、９・10・12．暗灰褐・暗褐・黒褐色土層、13．黒色土層の順で堆積している。１の盛土層は工場が建設された際に施されたものである。２・３及び４は近世～現代にかけて耕作土層である。当地は昭和62年まで石川県農業試験場実験圃場として使用されており、２・３についてはその時期の土層、４についてはそれ以前の耕作土である。５・６・７・８は灰色～灰褐色土を主体としており、近隣での調査から近世の土層に当たるものと思われる。９・10・12は褐色系を主体としており、本遺跡の中心である古代の土層と判断する。13は調査区西側を南北に走る鞍部に相当する層で古代より古い時期である。

第３節　遺構

粟田遺跡は縄文時代・古代・中世・近世の時期からなる遺跡であるが、本書で報告する粟田遺跡第16次調査は古代を主体とする。調査区の西側は旧の谷地形となっており目立った遺構はない。中

央から東側にかけてはところどころに礫原の混じる微高地が伸びており、扇状地特有の地形を示している。この微高地上に竪穴建物・掘立柱建物・土坑・ピット・道路状遺構・平行溝群・溝といった遺構が所在する。このうち竪穴建物や掘立柱建物といった建物は道路状遺構を挟んで北側と南側に分布している。調査区南西にはコンクリートの基礎と、そこから北と東の方向を指す近現代の流路があり、昭和時代にこの地にあった石川県農業試験場関係の施設跡である。

(1) 竪穴建物

1号竪穴建物（第17・18図）

D0・D1・E0・E1グリッドに位置する。東西5.3m、南北は4.3m以上で北側は調査区外に伸びている。1号竪穴建物内に4号竪穴建物が重複して位置しており、土層断面から1号竪穴建物のほうが古い。深度は約15cmで壁の立ち上がりは比較的ゆるやかである。軸はN－3°－Wである。覆土は稍明るい暗褐色土を主とする。カマドは確認されなかった。床面の状況も4号竪穴建物によって破壊されているため詳細は不明だが、破壊を免れた北側部分から貼床と思われる硬化面が確認されている。須恵器無台杯（1）、土師器（2）が出土している。

2号竪穴建物（第19図）

E5・F5グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸4.7m、短軸4.1m、面積は19.3㎡を測る。深度は約25cmで壁の立ち上がりは明瞭である。軸はN－18°－Wである。覆土は褐色土・暗褐色土を主とする。カマドは南東隅に設けられており、規模はおおむね長さ90cm、幅170cmとなる。貼床は北端・西端を除くほぼ全域で確認された。出土遺物は須恵器無台杯（3）、杯（4・5）、瓶類（6）、土師器釜・小釜（7～16）、鍋（17）、炉石（18）、土錘（19）である。

3号竪穴建物（第20図）

D1グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸3.2m、短軸2.6m、面積は8.3㎡を測る。深度は約60cmで壁の立ち上がりは直立もしくは稍内傾している。軸はN－18°－Wである。覆土は褐色土を中心にとする。カマドは確認されていない。貼床は北端・西端を除くほぼ全域で確認された。須恵器杯（20・22）、瓶類（21）を出土した。

4号竪穴建物（第17・18図）

D0・D1・E0・E1グリッドに位置し、1号竪穴建物内に重複して所在する。土層断面から1号竪穴建物より新しい。平面形は一辺が3.4mの正方形で、面積は11.6㎡を測る。深度は約60cmで壁の立ち上がりは明瞭である。軸はN－2°－Wである。覆土は暗褐色土・黒褐色土を中心にとする。カマドは南東隅に設けられており、規模はおおむね長さ70cm、幅110cmを測る。貼床はほぼ全域で確認された。出土遺物は須恵器無台杯（23～27）、椀（28）、釜・小釜（29～35）、須恵器甕（36）である。

5号竪穴建物（第20図）

F6グリッドに位置する。平面形はほぼ正方形で、長軸2.7m、短軸2.6m、面積は7㎡を測る。深度は約15cmで壁の立ち上がりは比較的明瞭である。軸はN－21°－Wである。覆土は暗褐色土を主とする。カマドは確認されなかった。建物内の東側を中心に貼床が確認された。出土遺物は少なく、実測しえたものは土師器釜（37）のみである。

6号竪穴建物（第21・22図）

E8・E9グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸6.0m、短軸4.1m、面積は24.6㎡と、今次調査中では最大規模の竪穴建物である。深度は約20cmで壁の立ち上がりは明瞭である。軸はN－30°－Wである。覆土は褐色土・暗褐色土を主とする。カマド自体は確認していないが、南東隅で多数の

土器片や焼土を確認しており、南東隅にカマドがあったと思われる。中央から南側にかけて貼床を確認した。土師器釜・小釜（38～42）、鍋（43）が出土している。

7号竪穴建物（第23図）

G5・G6グリッドに位置する。平面形は歪な方形で、長軸3.1m、短軸3.0m、面積は9㎡を測る。深度は約25cmで壁の立ち上がりは比較的明瞭である。軸はN－2°－Wである。覆土は暗褐色土を主とする。カマドは確認していない。出土遺物はない。

8号竪穴建物（第23図）

G7グリッドに位置する。平面形は歪な方形で、長軸2.9m、短軸2.3m、面積は6.7㎡を測る。深度は約20cmで壁の立ち上がりはそれほど明瞭ではない。軸はN－1°－Wである。覆土は暗褐色土を主とする。カマドは確認していない。土師器の小片が若干出土している。

(2) 掘立柱建物

今次調査では5棟の掘立柱建物を検出している。出土遺物は極めて少ないため遺物から時期の特定することはできないが、遺構の覆土や形状、周辺の状況によっていずれも古代の掘立柱建物と考えられる。

1号掘立柱建物（第24図）

D1・E1グリッドに位置する側柱建物である。桁行3間、梁行2間である。軸はN－13°－Wである。桁行は5.1m、梁行は4.0m、柱間距離は桁行1.7m、梁間2.0mで、面積は20.4㎡を測る。柱穴は円形ないし隅丸方形で、径は30～60cm、深さは約45cm、覆土は暗褐色土・黒褐色土を主とする。柱穴の底はいずれも硬く締まっている。718・722より土師器の小片が出土している。

2号掘立柱建物（第25図）

E6・E7グリッドに位置する側柱建物である。すぐ北に5号竪穴建物が所在している。規模は桁行4間、梁行2間で、軸はN－19°－Wである。桁行は8.0m、梁行は4.8m、柱間距離は桁行2.0m、梁間2.4mで、面積は38.4㎡を測る。柱穴は円形ないし隅丸方形で、径は40～50cm、深さは12～34cm、覆土は暗褐色土を主とする。遺物の出土はない。

3号掘立柱建物（第24図）

E7・E8グリッドに位置する総柱建物である。桁行、梁行とも2間である。軸はN－19°－Wである。桁行は4.0m、梁行は3.6m、柱間距離は桁行2.0m、梁間1.8mで、面積は14.4㎡を測る。柱穴は円形ないし楕円形で、径は28～50cm、深さは10～45cm、覆土は暗褐色土を主とする。遺物の出土はない。

4号掘立柱建物（第26図）

E9・F9グリッドに位置する側柱建物である。検出した規模は3×3間だが南側が調査区外に伸びているため全体の規模は分からない。軸はN－23°－Wである。桁行は5.0m以上、梁行は3.9m、柱間距離は桁行1.7m、梁間1.3mを測る。柱穴は円形や不整形で、径は16～50cm、深さは30～45cm、覆土は暗褐色土を主とする。出土遺物はない。

5号掘立柱建物（第26図）

F8グリッドに位置する側柱建物である。北東隅の柱穴は近代溝によって破壊されている。規模は桁行3間、梁行3間で、軸はN－20°－Wである。桁行は6.3m、梁行は4.8m、柱間距離は桁行2.1m、梁間1.6mで、面積は30.2㎡を測る。柱穴は円形ないし楕円形で、径は26～68cm、深さは30～45cm、覆土は褐色土・暗褐色土を主とする。遺物の出土はない。

(3) 土坑

2081（第27図）

G8グリッドに位置する。平面形は不整形である。規模は1.8×1.4m、深度は22cmを測る。覆土は褐色土を主とする。出土遺物はない。

2102（第27図）

G8グリッドに位置する。平面形は歪な方形である。2103を切っている。規模は1.8×1.4m、深度は30cmを測る。覆土は褐色粘質土で礫が混じる。打製石斧（62）が出土している。

2956（第27図）

E9グリッドに位置する。南側は調査区外に伸びている。検出した規模は2.5×0.8m、深度は40cmである。覆土は暗褐色土である。土師器小釜（54・55）が出土している。

(4) ピット

1372（第28図）

D1グリッドに位置する。平面形は歪な楕円形である。2つのピットが複合したものか。規模は72×42cm、深度は28cmを測る。覆土は黒褐色土である。須恵器杯・有台杯（47・48）が出土している。

2137（第28図）

G9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は98×74cm、深度は30cmを測る褐色土・暗褐色土を主とする。覆土は黒褐色土である。出土遺物はない。

2549（第28図）

E5グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は68×47cm、深度は31cmを測る。覆土は暗褐色土である。須恵器杯（51）が出土している。

3082（第28図）

D7グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は64×27cm、深度は20cmを測る。覆土は暗褐色土である。土師器小釜（56）が出土している。

(5) 道路状遺構

道路状遺構（第29図）

E4グリッドからJ2グリッドにかけて東北東から西南西に伸びる平行な2条の溝を検出した。途中溝が途切れる箇所もあるが道路状遺構と判断した。東側は調査区外に伸びているが、西側はD4・D5グリッドあたりで途切れている。検出した長さは約60m、幅は4.6～5.2m、軸はN－62°－Eである。道路面からは硬化面は確認されなかった。北側の溝は幅30～110cm、深さはおおむね20～40cmである。南側の溝は幅55～130cm、深さは20～40cmだが、一部で60cmを超えるところがある。土色は褐灰色土・暗褐灰色土を主とする。遺物はほとんど確認できず、図化しうるものはなかった。

(6) 溝

2571（第29図）

D5・E5グリッドに位置する。南側は近代溝によって破壊されており、東に湾曲して北に向かっている。検出した長さは約15m、幅は40cm、深さは40cmを測る。覆土は黄色土・明褐色土を主とする。2571は道路状遺構南側溝に切られており、道路状遺構が機能していた時期には既に埋まっていたようである。出土遺物はない。

2957（第29図）

D5グリッドに位置する。道路状遺構南側の溝にそのまま続くようであるが、方向がやや南を向き、溝の幅も最大で60cmと狭い。西側は近代溝によって破壊されているため規模は分からない。覆土は褐灰色土を主とする。遺物の出土はなかった。

(7) 平行溝群

平行溝群A（第30図）

E1・E2・F0～F2グリッドにかけて位置する。長さは2.4～8m、幅は30～50cm、深さは8～24cmを測る。軸はN－18°－W前後で、おおむね南北方向を向く。覆土は暗褐色土を主とする。この平行溝群からは若干の遺物が出土しており、土師器小釜（44）、須恵器有台杯（45）、甕（46）を図化した。

平行溝群B（第30図）

D1グリッドに位置する。近代溝によって切られているため、全体の規模は分からない。検出した長さは1.3～3.5m、幅は30cm、深さは12～24cmを測る。軸はN－78°－W前後で平行溝群Aとは異なり東西方向を向く。覆土は暗褐色土を主とする。出土遺物はない。

第4節　遺物（第31～37図）

今次調査で出土した遺物の多くが古代の土師器・須恵器であり、他に打製石斧・砥石・近世陶磁器が若干出土した。このうち実測した遺物は71点である。

1は須恵器無台杯である。底部外面に「×」の線刻がある。2は鉄滓である。6は須恵器瓶類で自然釉がかかる。11は土師器小釜で外面は磨耗している。12・13も土師器小釜で外面は剥離が著しい。16は土師器釜で内面に煤が付着する。18はカマド石で被熱痕が残る・19は土錘である。20は須恵器杯で口縁部に重ね焼痕が残る。23は須恵器無台杯である。焼成は不良で磨耗している。28は土師器椀で内外面に赤彩されている。外面には煤が付着する。29は土師器小釜で煤が付着する。31は土師器釜で内外面とも煤が付着し磨耗している。33は土師器釜で外面全体に煤が付着する。34・35も土師器釜で一部に煤が付着する。40は土師器小釜で外面に煤と剥離が見られる。56は内外面赤彩の土師器椀である。57は須恵器瓶類で底部内面に自然釉がかかる。59は縄文深鉢で条痕がある。59・61は肥前磁器碗である。60は肥前陶器碗で呉器手である。62～70は打製石斧で分銅型のものが多い。石質は火山礫凝灰岩が多数を占める。

第4章　総　括

縄文・弥生時代

当該期の遺構としては若干の土坑・ピットを検出したのみで建物の跡は確認していない。この辺りの地形は手取川によって形成された扇状地の扇央部であり、地山面はところどころに礫原が広がっている。東隣で行われた既往の発掘調査では多数の打製石斧とその母岩が出土しており、打製石斧の素材採取地と考えられている。今次調査では母岩は確認できなかったが打製石斧は定量出土しており、当該地も打製石斧の素材採取地として利用されていたものと考えられる。

奈良・平安時代

栗田遺跡の主体を占める時期である。今次調査では主要な遺構として5棟の掘立柱建物と8棟の竪穴建物、道路状遺構、平行溝群などを検出している。遺構の詳細な時期については、一部の竪穴建物を除くと出土遺物が極めて少ないため判断は難しい。しかしこれまでに本調査区の近隣において発掘調査が行われており、その様相は明らかになりつつある。よってここでは、既往の調査成果を援用しながら、出土遺物と建物軸を基に遺構の変遷をたどることにする。

Ⅰ期

1～6号竪穴建物で構成される。これら竪穴建物の分布は南北の2つに分かれる。まず北側では主軸をほぼ真北にとる1・4号竪穴建物と主軸を西に振る3号竪穴建物からなる。1・4号竪穴建物は同一の場所での建替えであり1号竪穴建物が4号竪穴建物に先行する。3号竪穴建物は1・4号竪穴建物に後続すると見られる。なお、3号竪穴建物は壁面が直立ないしはやや内傾しており、深度も60cmと深く一般的な住居とは考えにくい。一方南側では主軸を西に振る2・5・6号竪穴建物からなる。6号建物は2・5竪穴建物よりやや後続するようである。田嶋編年のⅢ期～Ⅳ1期に相当する。

Ⅱ期

7・8号竪穴建物と1～5号掘立柱建物によって構成され、掘立柱建物が中心となる時期である。建物の分布はⅠ期同様南北の2つに分かれる。北側では主軸を西に振る1号掘立柱建物が確認された。Ⅰ期に所属させた3号竪穴建物とは切りあっており、確実に後続する。南側ではやはり主軸を西に振る2～5号掘立柱建物を検出した。このうち3号掘立柱建物は2×2間の総柱建物であり、倉庫的なものであり、或いはⅠ期の6号竪穴建物に付属するものかもしれない。7・8号竪穴建物は主軸がほぼ真北を向く。出土遺物がほとんどないため遺物から存続時期を判断することはできないが、他の竪穴建物と比べると規模が小さく形状も歪である。既往の調査や南隣する下新庄アラチ遺跡の発掘調査によって掘立柱建物が中心となる時期の竪穴建物は規模を縮小しプランも歪雑化する傾向が見られ、7・8号竪穴建物についても同様の傾向を示すものと考えたい。田嶋編年のⅣ1～Ⅳ2新期に相当する。

以上のようにこの時代は竪穴建物を中心とするⅠ期と、竪穴建物から掘立柱建物へと移行するⅡ期に分けることができる。当該期の栗田遺跡は既往調査と同様に、数棟単位の建物が点在する散居村的な集落であったことが確認された。

なお道路状遺構についても明確な出土遺物はほとんどなく時期の特定は難しい。しかし本調査区の東隣で行われた調査によってN－21°－Eを向く道路状遺構を確認しており、今回検出した道路状遺構（N－62°－W）とは直角に近い角度であることを確認している。両者が交差していた形跡は見ら

れなかったが、それぞれの存在を意識して築造されていた可能性があり、同時期に存在していたと考えたい。

中世以降

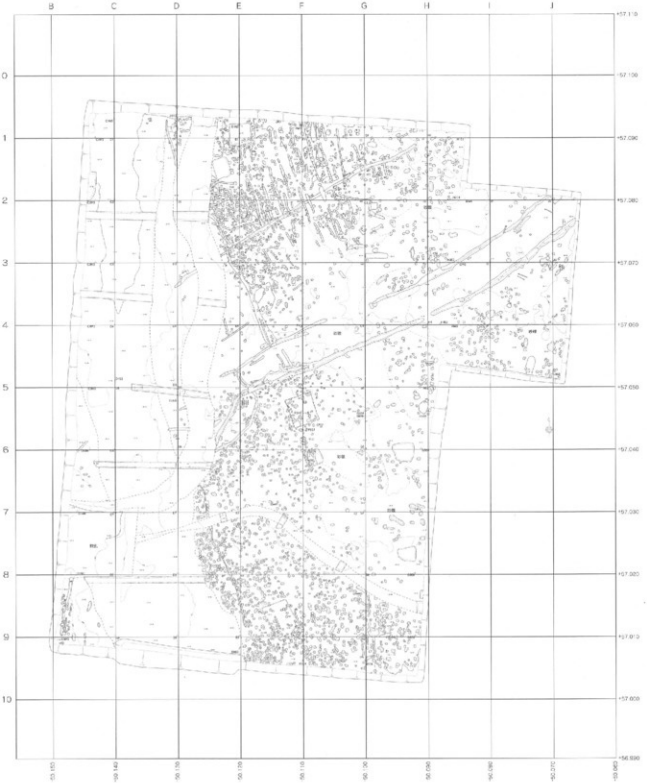
中世以降の遺構はほとんど確認されていない。調査区の西側で南北方向の溝が、また南側で蛇行する東西の溝がそれぞれ検出されている。近世～現代時期の遺物が確認されており、農業用の用水として利用されたのであろう。またこれらの溝の接点からはコンクリートの基礎が確認された。昭和61年までこの地にあった石川県の農業試験場の施設跡である。

参考文献

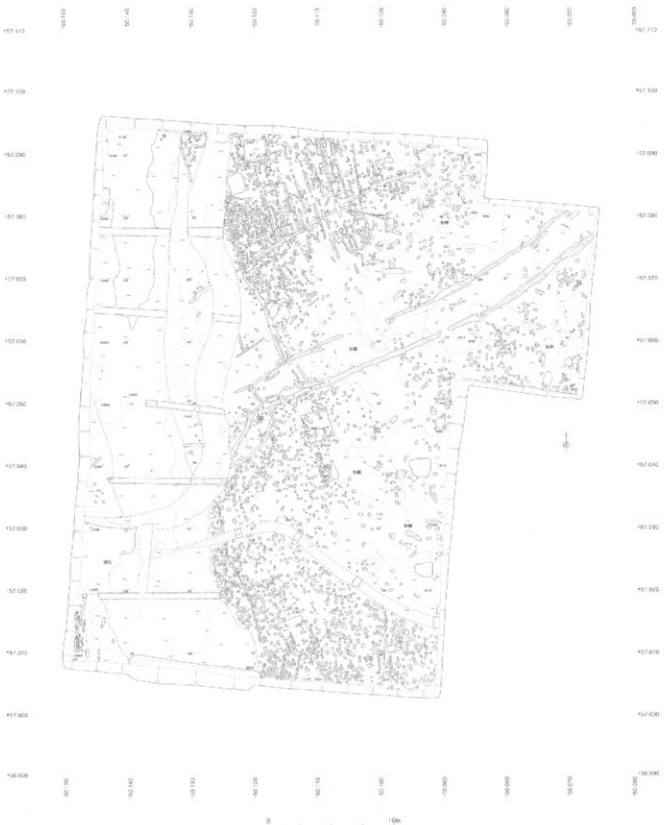
(社) 石川県埋蔵文化財保存協会　1991　『栗田遺跡発掘調査報告書』
石川県教育委員会　(財) 石川県立埋蔵文化財センター　2005　『末松遺跡』
小松市教育委員会　2002　『二ツ梨一貫山窯跡』
小松市教育委員会　2006　『額見町遺跡Ⅰ』
野々市町教育委員会　1992　『栗田遺跡第二次発掘調査報告書』
野々市町教育委員会　1998　『上新庄ニシウラ遺跡』
野々市町教育委員会　1999　『下新庄アラチ遺跡』
野々市町教育委員会　2000　『上林新庄遺跡　上林テラダ遺跡　上林古墳　下新庄タナカダ遺跡』
野々市町教育委員会　2000　『栗田遺跡泰平地区・荷金アガトウ遺跡』
野々市町教育委員会　2006　『栗田遺跡（第10次）・三納アラミヤ遺跡（第1・2次）・三納トヘイダゴシ遺跡（第1・3次）』
野々市町教育委員会　2008　『栗田遺跡（第12・15次）』
野々市町史専門委員会　2003　『野々市町史　資料編1』　石川県野々市町

遺物観察表

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色調	色調	胎土	備考
1	1	1号竪穴建物	131・227	須恵器	無台杯	(142)	36	98	5/9	外：灰白	内：灰白	S-1・M-1	底部×印
2	8	1号竪穴建物	1	鉄製品	鉄滓	50	40	36		外：	内：		79g
3	13	2号竪穴建物	南北帯・南隅床・17・86	須恵器	無台杯	116	28	70	1/6	外：灰黄	内：灰黄	S-1・M-1・L-1	
4	15	2号竪穴建物	95・12・P11底	須恵器	杯	138	32		2/9	外：灰黄	内：灰黄	S-1・M-1・L-1	
5	14	2号竪穴建物	1	須恵器	杯			80	1/3	外：灰白	内：灰白	S-1・M-1	
6	26	2号竪穴建物	95	須恵器	瓶類			122	1/6	外：褐灰	内：黄灰	S-1	
7	16	2号竪穴建物	59	土師器	釜				小片	外：橙	内：浅黄橙	S-1・黒色粒・赤色粒	
8	10	2号竪穴建物	12	土師器	小釜	136			1/4	外：灰黄褐	内：灰黄褐	S-1・M-1・黒色粒	
9	11	2号竪穴建物	12	土師器	小釜				小片	外：灰黄褐	内：浅黄橙	S-1・黒色粒	8と同一か
10	25	2号竪穴建物	15・44・カマド周辺	土師器	小釜	112			1/3	外：にぶい黄褐	内：にぶい黄橙	S-1・黒色粒	
11	12	2号竪穴建物	12上層	土師器	小釜	154			1/4	外：灰黄褐	内：灰黄褐	S-2・M-1・黒色粒	
12	24	2号竪穴建物	カマド62〜64・カマド周辺・カマド67	土師器	小釜			90	底部ほぼ完形	外：灰黄褐	内：にぶい黄橙	S-2・M-1・赤色粒	
13	21	2号竪穴建物	カマド周辺	土師器	小釜			40	底部完形	外：灰黄褐	内：浅黄橙	S-1・M-1・黒色粒・赤色粒	
14	23	2号竪穴建物	12・カマド75・77	土師器	小釜			142	底部ほぼ完形	外：浅黄橙	内：浅黄橙	S-1・M-1・黒色粒・赤色粒	
15	17	2号竪穴建物	16	土師器	釜	228			1/12	外：橙	内：にぶい橙	S-1・黒色粒	炭化物付着
16	18	2号竪穴建物	61	土師器	釜	204			1/6	外：にぶい黄橙	内：浅黄橙	S-1・黒色粒・赤色粒	
17	22	2号竪穴建物	92・37・9・10・11・39・35	土師器	鍋	300			1/9	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	S-1・黒色粒・赤色粒	
18	19	2号竪穴建物	12	石製品	炉石	269	174	107		外：	内：		6.75kg
19	20	2号竪穴建物	94	土製品	土錘	47	34	30	完形	外：黄橙	内：黄橙	S-1・黒色粒	
20	27	3号竪穴建物	30	須恵器	杯	130			1/12	外：灰白	内：灰白	S-1	
21	28	3号竪穴建物	帯D中層・下層	須恵器	瓶類			119	1/9	外：オリーブ褐	内：黄灰	S-1	
22	29	3号竪穴建物	帯C上層	須恵器	杯	116			1/12	外：灰黄	内：灰黄	S-1	
23	31	4号竪穴建物	東帯	須恵器	無台杯	142	32	104	1/7	外：灰白	内：灰白	S-1	焼成不良
24	35	4号竪穴建物	254	須恵器	有台杯				底部小片	外：灰白	内：灰白	S-2・M-1	焼成不良
25	3	4号竪穴建物	112	須恵器	無台杯	(152)	30	(112)	小片	外：灰	内：灰	S-1	
26	7	4号竪穴建物	30	須恵器	無台杯	130	38	76	1/4	外：灰白	内：灰白	S-1・M-1・L-1	
27	追加	4号竪穴建物	189・218・222	須恵器	有台杯			124	1/2	外：灰黄	内：灰黄	S-2	
28	6	4号竪穴建物	南帯中層	土師器	椀	(160)				外：にぶい赤褐	内：にぶい赤褐	S-1	赤彩
29	2	4号竪穴建物	168・北帯	土師器	小釜	142			1/9	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	S-1・M-1	
30	4	4号竪穴建物	55	土師器	釜	194			1/6	外：浅黄橙	内：にぶい黄橙	S-2・赤色粒	
31	9	4号竪穴建物	205	土師器	釜	208	168		1/9	外：にぶい黄橙	内：灰黄褐	S-2・赤色粒	
32	34	4号竪穴建物	カマド	土師器	小釜				小片	外：にぶい黄橙	内：橙	S-2・M-1	
33	32	4号竪穴建物	4号57・4号58・4号5・4号カマド3	土師器	釜				小片	外：黒褐	内：にぶい黄橙	S-2・赤色粒	
34	33	4号竪穴建物	カマド中央・22・13・20・24・25・29・30	土師器	釜	240			1/4	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	S-1・赤色粒	
35	30	4号竪穴建物	南帯中央	土師器	釜	212			1/3	外：にぶい橙	内：橙	S-1・M-1・L-1	
36	5	4号竪穴建物	4号23・4号東帯中央	須恵器	甕				小片	外：灰黄	内：灰白	S-1	
37	49	2198	9	土師器	釜	196			2/9	外：にぶい黄橙	内：浅黄橙	S-1・黒色粒・赤色粒	
38	57	2825	112	土師器	釜				小片	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	S-2・M-1	
39	54	2825	25	土師器	小釜	137			7/18	外：橙	内：橙	S-2・L-1・石英	
40	53	2825	29・82	土師器	小釜	165			1/5	外：灰黄褐	内：にぶい黄橙	S-2・M-1	
41	56	2825	11	土師器	小釜			88	1/3	外：にぶい橙	内：にぶい橙	S-2	
42	55	2825	56・61・29・68	土師器	釜	250			1/6	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	S-2・M-1	
43	52	2825	7	土師器	鍋	348			1/6	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	S-2・M-1	
44	36	463		土師器	小釜			74	1/3	外：明黄褐	内：浅黄橙	S-1・黒色粒・赤色粒	炭化物付着
45	39	712		須恵器	有台杯			104	7/18	外：灰	内：灰	S-1・M-1	
46	40	822		須恵器	杯	328			1/18	外：灰	内：灰	S-1・黒色粒	
47	38	1372		須恵器	杯	158			2/9	外：灰黄	内：灰黄	S-1・L-1	48と同一個体
48	37	1372		須恵器	有台杯			112	1/4	外：灰黄	内：灰黄	S-1・M-1	47と同一個体
49	46	2119		土師器	小釜				小片	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	S-1・M-1	
50	48	2423		土師器	小釜	140			1/9	外：にぶい黄橙	内：浅黄橙	S-1・黒色粒	
51	47	2549		須恵器	杯			68	1/3	外：灰黄	内：灰黄	S-1・M-1・L-1	焼成不良
52	45	2908・2951		須恵器	杯			86	1/2	外：灰白	内：灰白	S-1・M-1・黒色粒	
53	44	2951	表面	土師器	小釜			48	5/18	外：灰黄褐	内：にぶい黄橙	S-1・M-1・黒色粒	
54	43	2956		土師器	小釜			68	5/6	外：灰黄褐	内：浅黄橙	S-1・黒色粒・赤色粒	
55	42	2956		土師器	小釜	122			2/9	外：にぶい黄橙	内：明黄褐	S-1・M-1・黒色粒	
56	58	3082		土師器	椀	82			5/9	外：橙	内：橙	S-1・L-1・黒色粒・赤色粒	赤彩
57	62	近世溝	表面	須恵器	瓶類			114	7/13	外：灰	内：灰白	S-1・M-1	
58	59	撹乱		縄文土器	深鉢			124	1/4	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄褐	S-3	
59	66	近世溝	下層	肥前磁器	碗			38	底部完形	釉：灰白	胎：灰白	黒色粒	
60	63	近世溝		肥前陶器	碗			30	1/3	釉：浅黄	胎：浅黄	S-1	
61	67	近世溝	下層	肥前磁器	碗			43	底部完形	釉：明オリーブ	胎：灰白	黒色粒	
62	41	2102		石製品	打製石斧	(129)	(92.5)	(21)		外：	内：		355g、火山礫凝灰岩
63	50	2825		石製品	打製石斧	137	85	24	完形	外：	内：		310g、片麻岩
64	51	2825	103	石製品	打製石斧	(137)	(89.5)	(37)		外：	内：		350g、砂岩
65	60	北壁		石製品	打製石斧	(153)	(92.5)	(38)		外：	内：		472g、凝灰岩
66	71	東壁		石製品	打製石斧	(131)	(85.5)	(26)		外：	内：		280g、火山礫凝灰岩
67	64	包含層		石製品	打製石斧	150	89.5	30	完形	外：	内：		405g、凝灰岩
68	68	包含層	H7グリッド	石製品	打製石斧	221	114.5	43	完形	外：	内：		1020g、火山礫凝灰岩
69	69	包含層	E3グリッド	石製品	打製石斧	(116)	(74)	(21)		外：	内：		250g、安山岩
70	70	撹乱		石製品	打製石斧	176	114	39	完形	外：	内：		740g、火山礫凝灰岩
71	65	近世溝	下層	石製品	砥石	(53)	(35)	(23)		外：	内：		80g



第4図　グリッド図（1/300）



第5図　全体平面図（1/300）

第6図　平面図(1)（1/120）

粟田遺跡（第16次）平面図NO.2

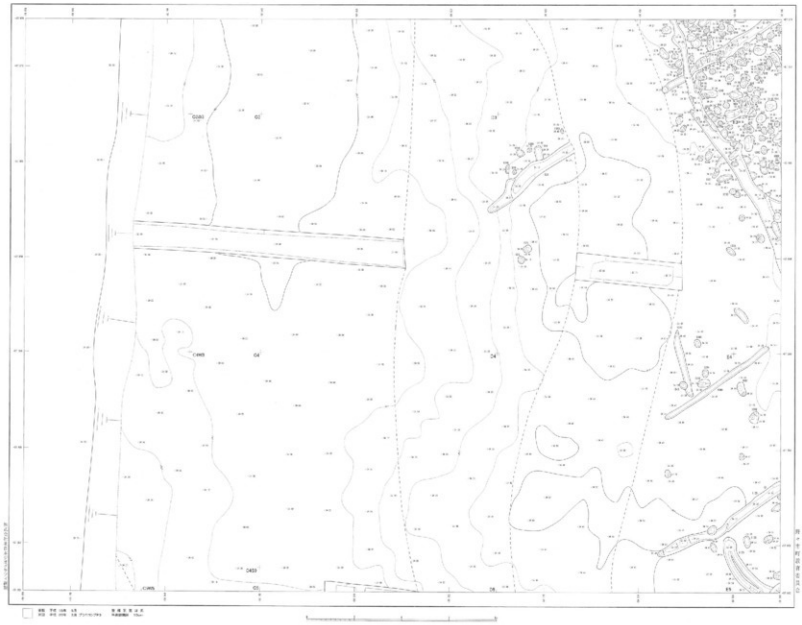
2007

第7図 平面図(2) (1/120)

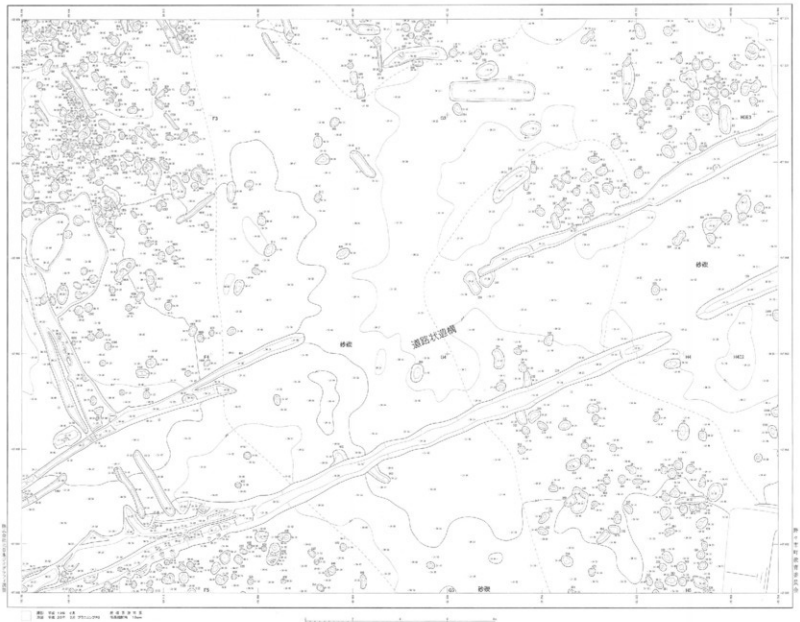
粟田遺跡（第16次）平面図NO.3　2007

第8図　平面図(3)（1/120）

栗田遺跡（第16次）平面図NO.4　2007



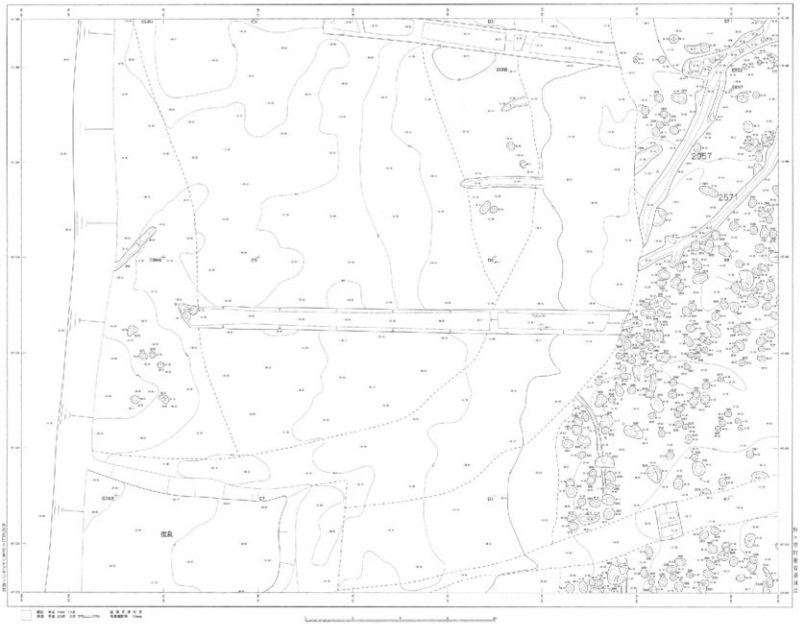
第9図　平面図(4)（1/120）



第10図　平面図(5)（1/120）

粟田遺跡（第16次）平面図NO.6　2007

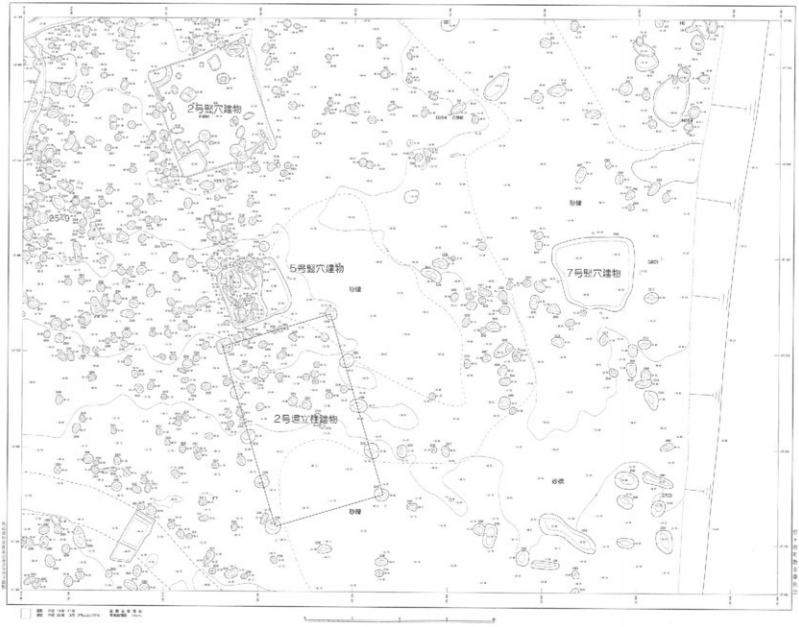
第11図　平面図(6)（1/120）



第12図　平面図(7)（1/120）

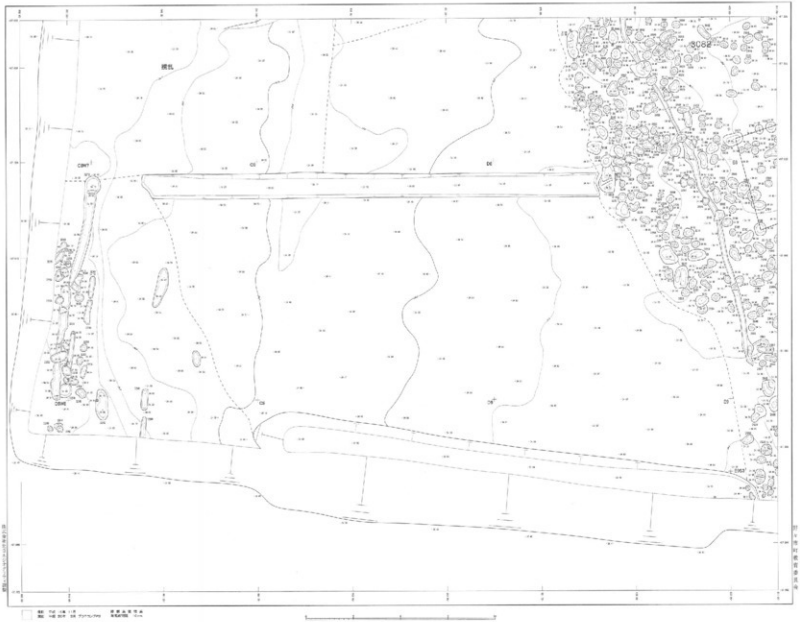
粟田遺跡（第16次）平面図NO.8

2007



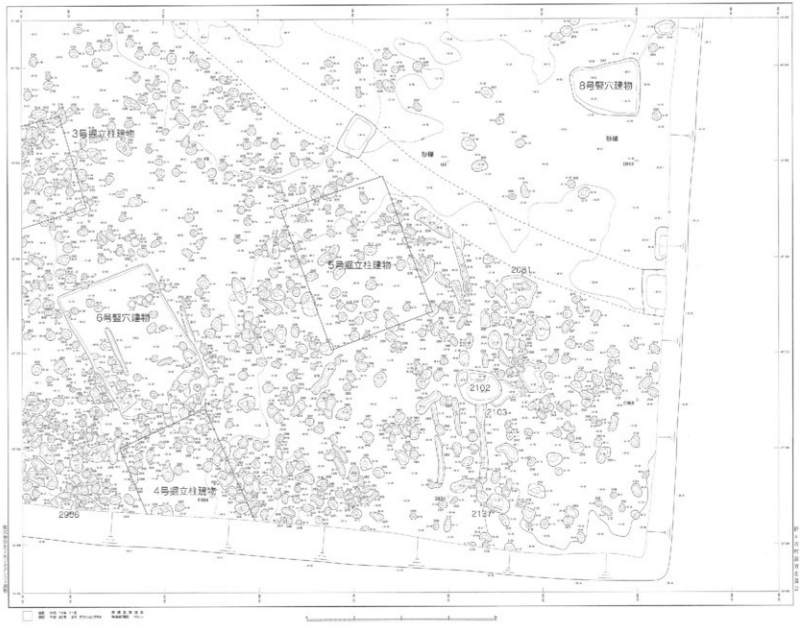
第13図　平面図(6)（1/120）

粟田遺跡（第16次）平面図NO.9　2007

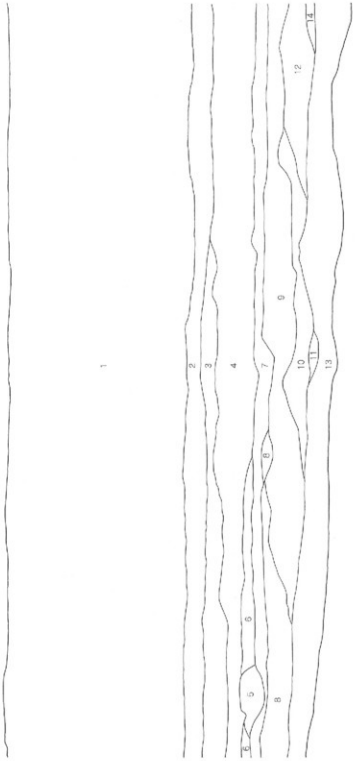


第14図　平面図(9)（1/120）

粟田遺跡（第16次）平面図NO.10　2007

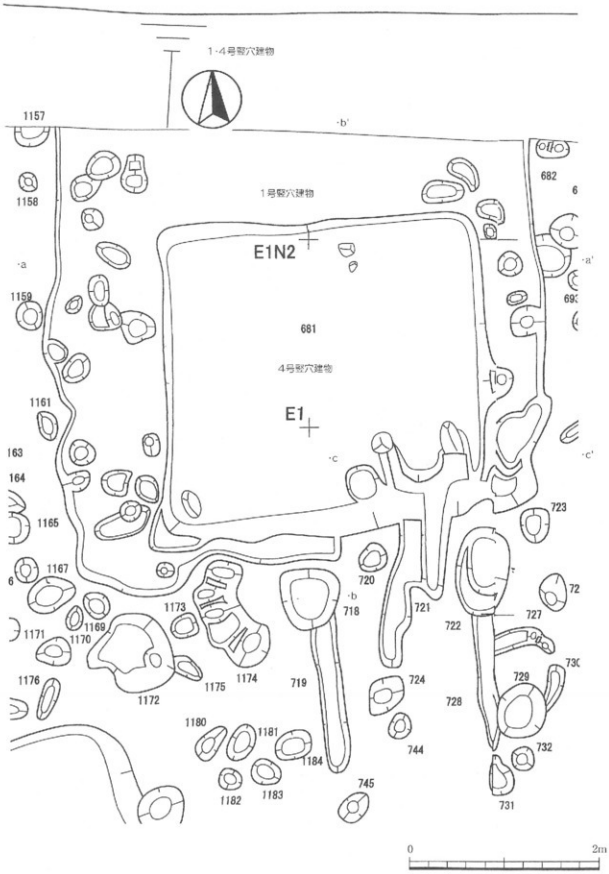


第15図　平面図(10)（1/120）

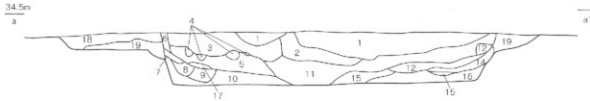


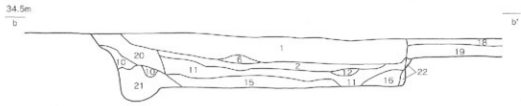
0 1m

第16図　南側壁面土層断面図（1/20）

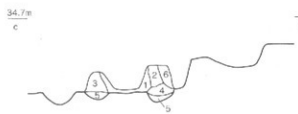


第17図　遺構実測図　1·4号竪穴建物(1)（1/40）

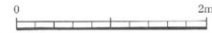




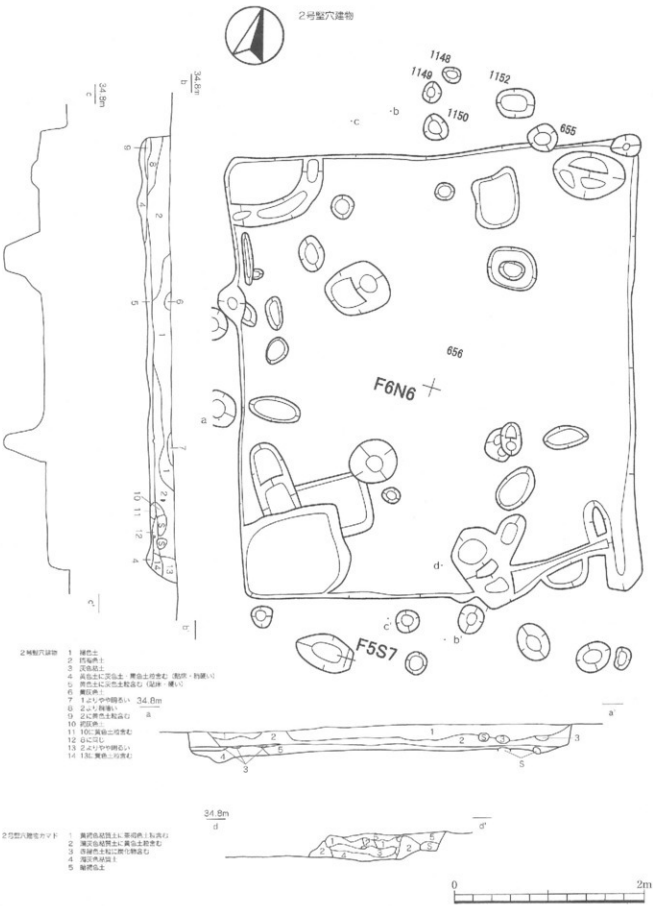
1・4号竪穴遺構　1　暗褐色土
2　淡黄色土に黄色土粒含む
3　1に黄色土粒少量含む
4　黄色土　褐色土　灰色土の混合
5　褐色に灰色土粒含む
6　1より明るい
7　褐灰色土
8　7に黄色土粒含む
9　8より明るい
10　茶褐色粘質土
11　黄色土に灰色土粒少量含む
12　灰白色土
13　12に黄色土粒多く含む
14　12よりやや暗るい
15　淡黄色土
16　灰褐色粘質土
17　黄褐色土
18　1より暗るい
19　黄色土・淡黄色土・褐灰色土の混合（締まり）
20　11よりやや明るい
21　黄褐色粘質土
22　16に灰色土粒含む



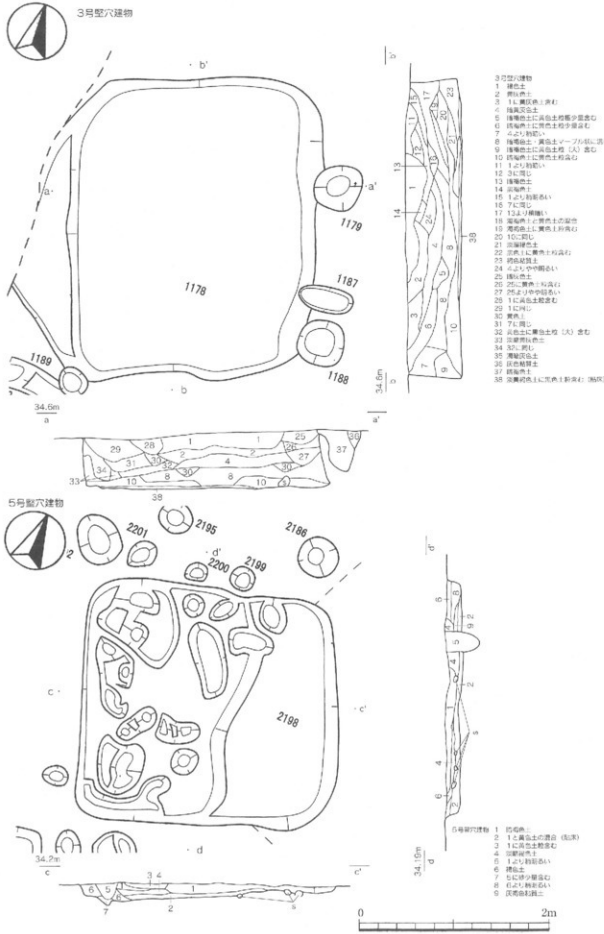
4号竪穴建物カマド　1　赤褐色土（焼土）
2　黒褐色土
3　黄褐色粘質土
4　淡褐色粘質土
5　褐灰褐色粘質土に灰小礫含む



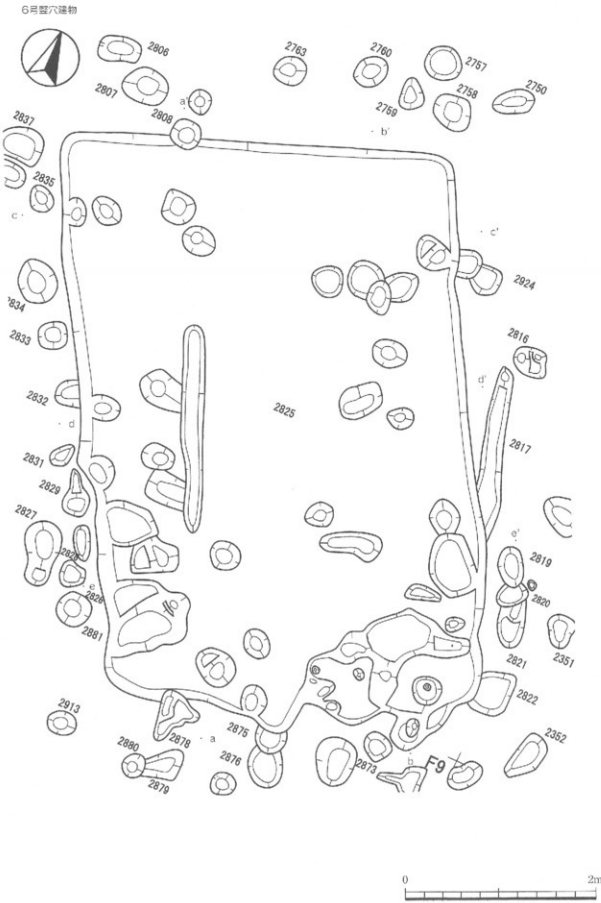
第18図　遺構実測図　1・4号竪穴建物(2)（1/40）



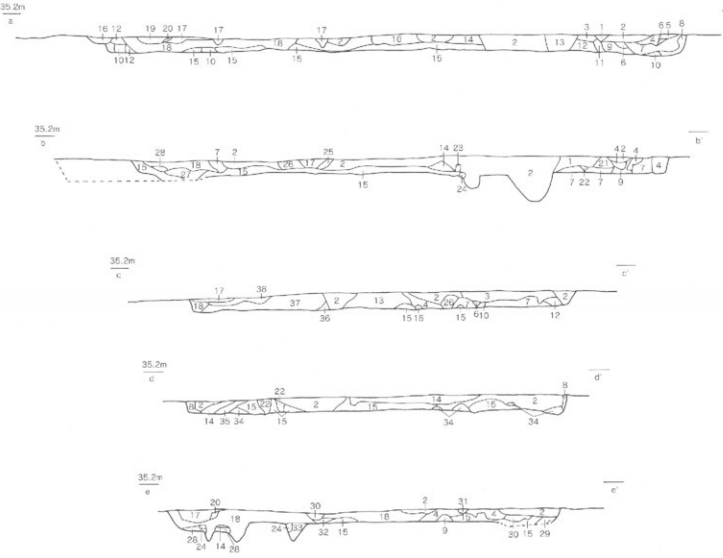
第19図　遺構実測図　2号竪穴建物（1/40）



第20図　遺構実測図　3・5号竪穴建物（1/40）



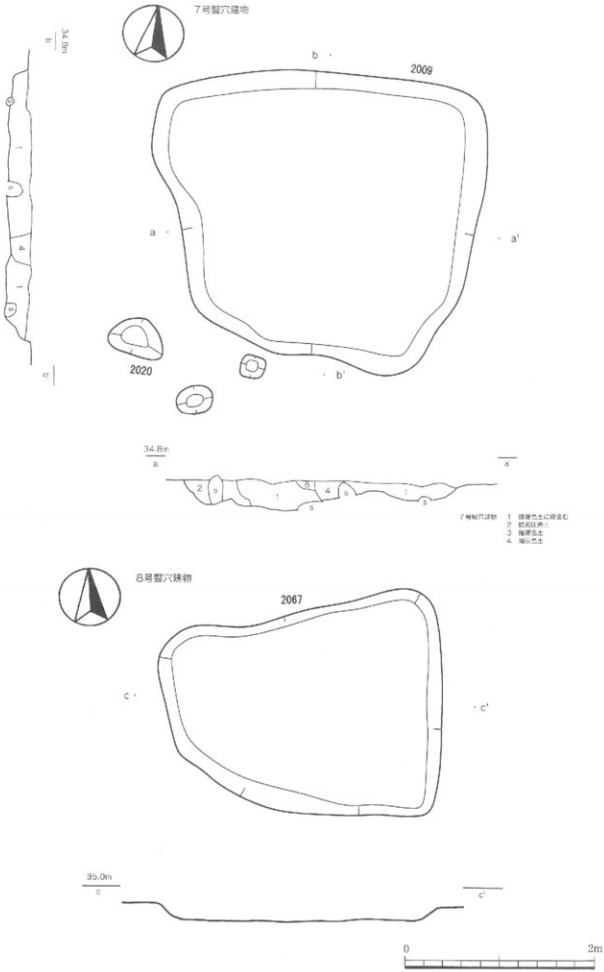
第21図　遺構実測図　6号竪穴建物(1)（1/40）



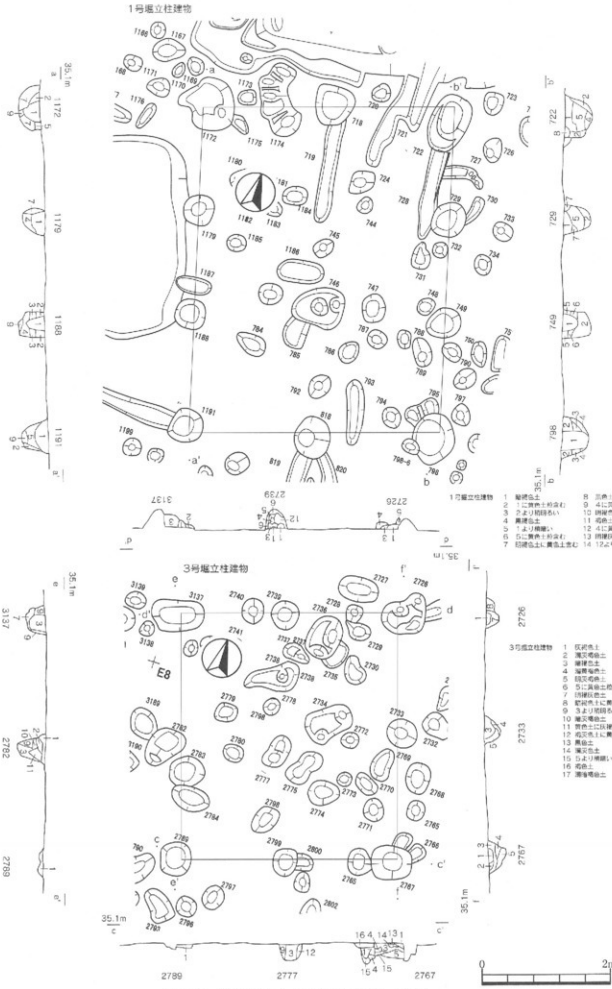
6号竪穴建物
1 淡褐色土
2 暗色土
3 1に黄色土粒混む
4 淡褐褐色土
5 褐褐色土
6 4と黄色土粒混む
7 黄色土
8 炭化・焼褐色土の混合
9 9が暗色土に黄色土粒混む
10 黄色土と炭化色土粒少量混む
11 黄色粒質土に炭化色土混む
12 炭褐色土に黄色土粒混む
13 褐色粒色土に黄色土粒混む
14 2より明るい
15 2より褐暗い
16 褐灰褐色土に黄色土粒混む
17 灰色粒色土
18 石と黄土
19 17に褐色混む
20 17に黄色土粒混む
21 淡褐色土
22 淡褐灰色土
23 淡褐灰色土に黄色土粒混む
24 黄色土・暗色土の混合（ローム）
25 2に黄色土粒・黄色土粒混む
26 2に黄色土粒混む
27 暗灰色土に黄色土粒混む
28 「2より褐暗い
29 暗灰色土
30 黄色土に褐褐色土粒混む
31 褐灰色土
32 淡褐褐色土
33 淡褐褐色土に黄色土粒混む
34 褐灰色土に黄色土粒混む
35 15に黄色土粒混む
36 褐褐色土
37 2より褐暗い
38 37に黄色土粒混む

0 2m

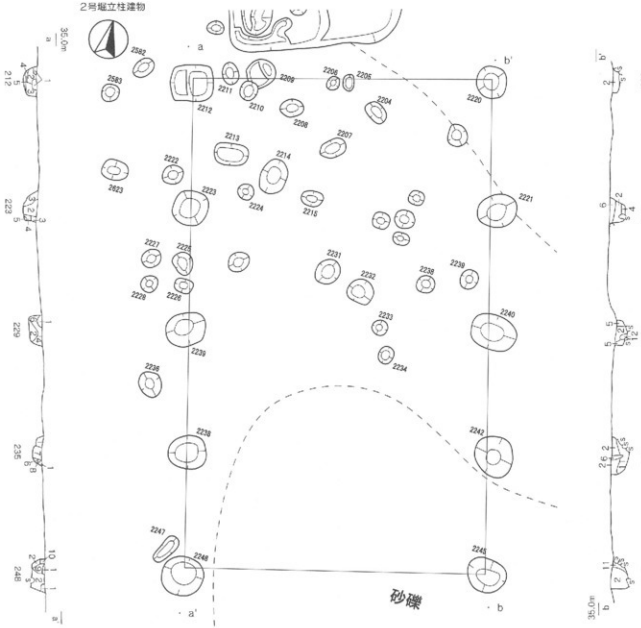
第22図　遺構実測図　6号竪穴建物(2)（1/40）



第23図　遺構実測図　7・8号竪穴建物（1/40）

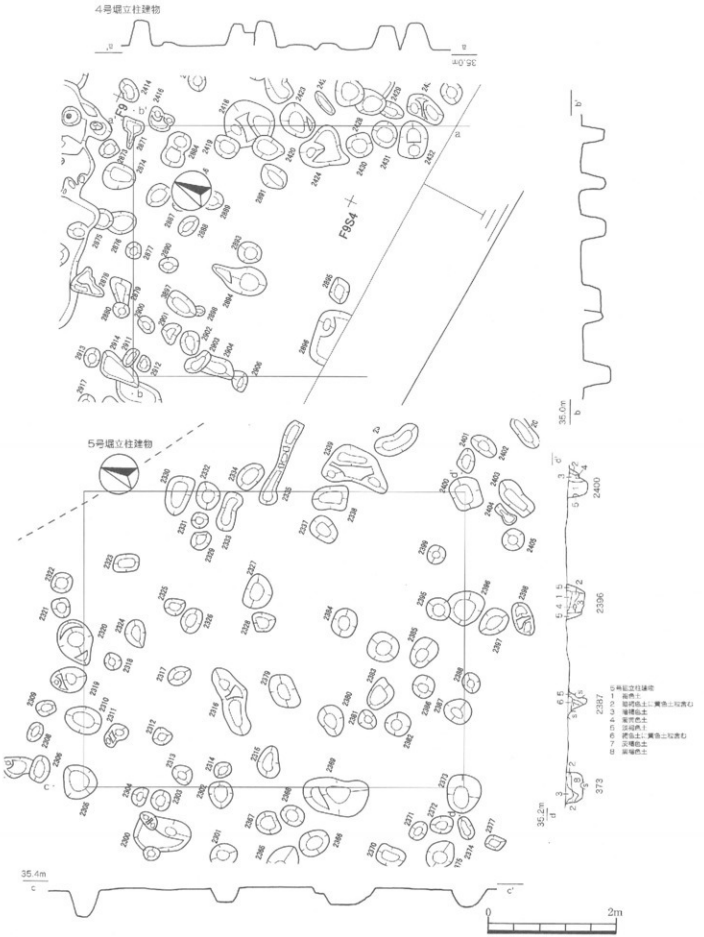


第24図　遺構実測図　1・3号掘立柱建物（1/60）

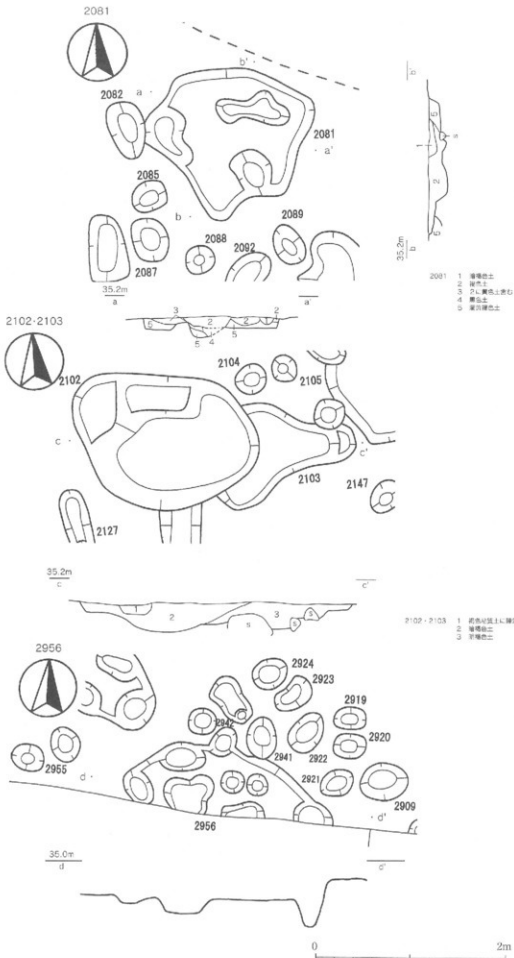


2号堀立柱建物
1 褐色土に黄色土粒含む
2 暗褐色土
3 灰褐色土
4 少し黄色土粒含む
5 明褐色土と黄色土の混合
6 褐色土
7 褐灰色土
8 黒褐色土
9 黒褐色土
10 より黄色土粒多く含む
11 より明褐色い
12 明褐色土

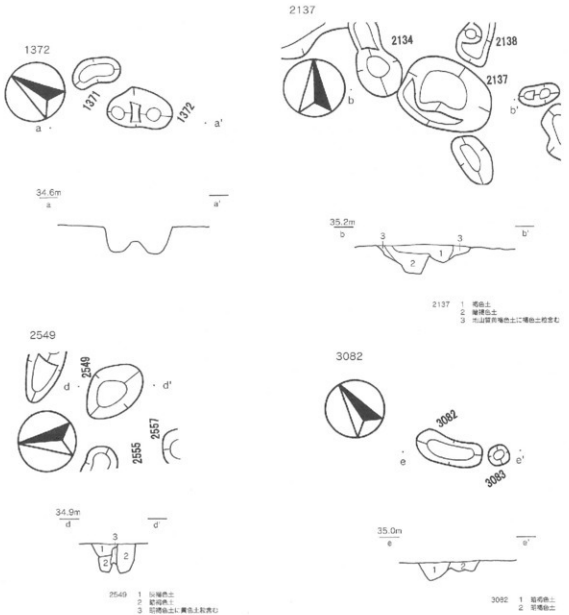
第25図　遺構実測図　2号掘立柱建物（1/60）



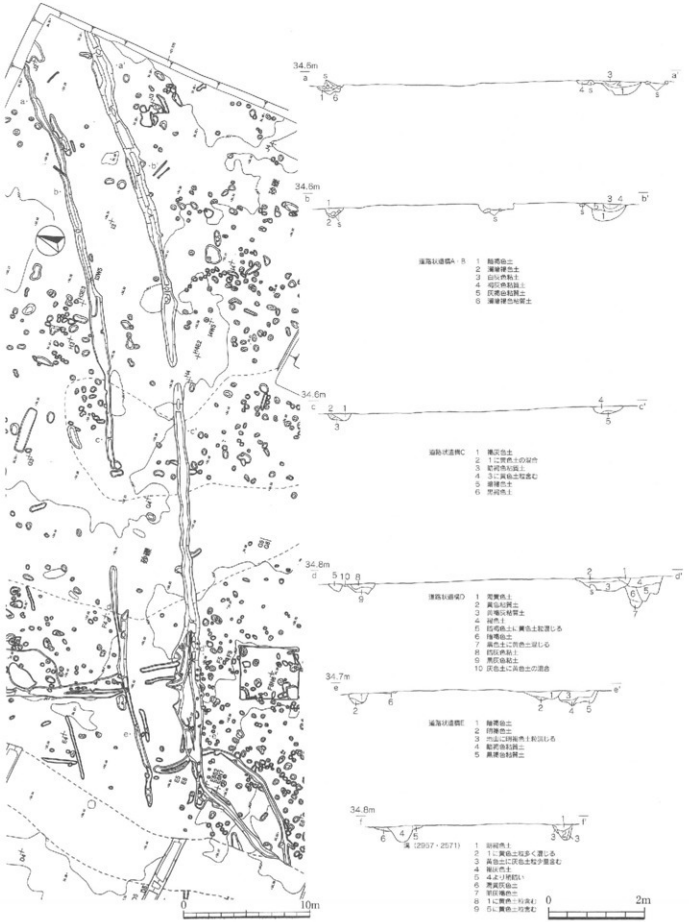
第26図　遺構実測図　4·5号掘立柱建物（1/60）



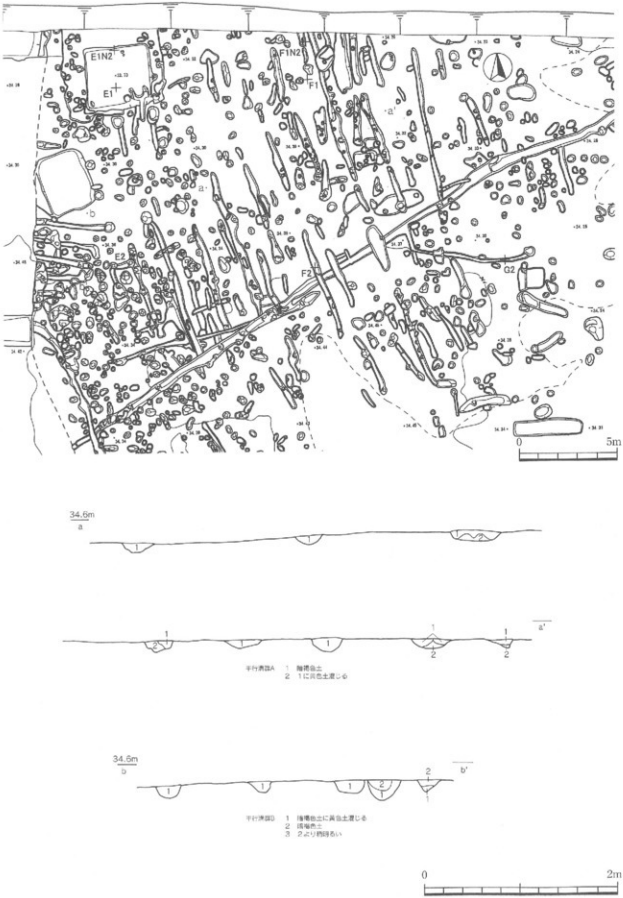
第27図　遺構実測図　土坑2081・2102・2103・2956（1/40）



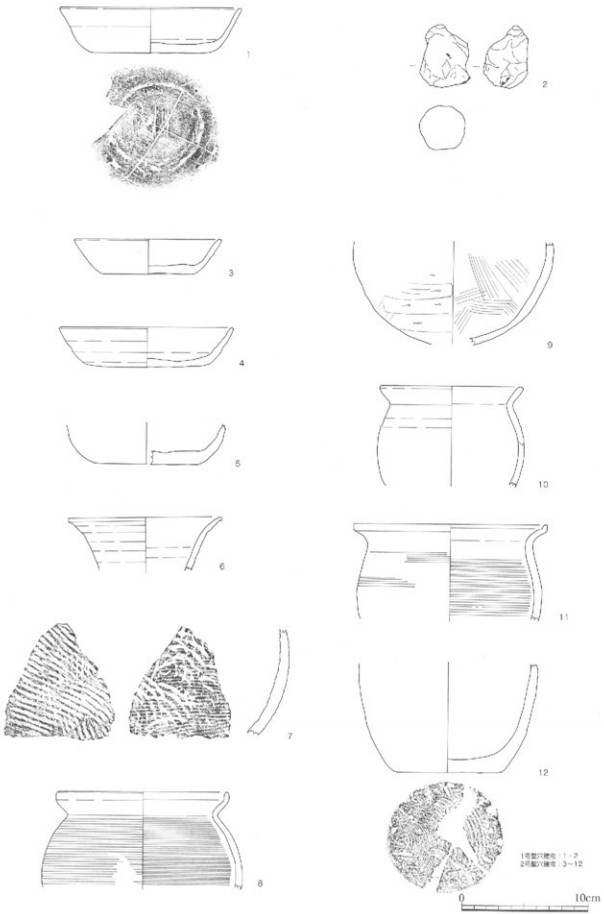
第28図　遺構実測図　ピット1372・2137・2549・3082 (1/40)



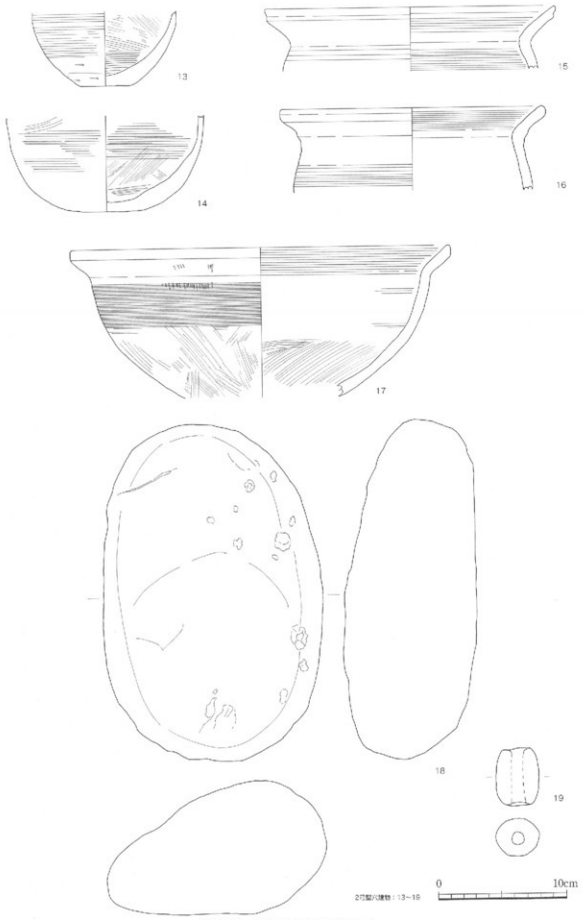
第29図　遺構実測図　道路状遺構・溝2571・2957（1/300・1/80）



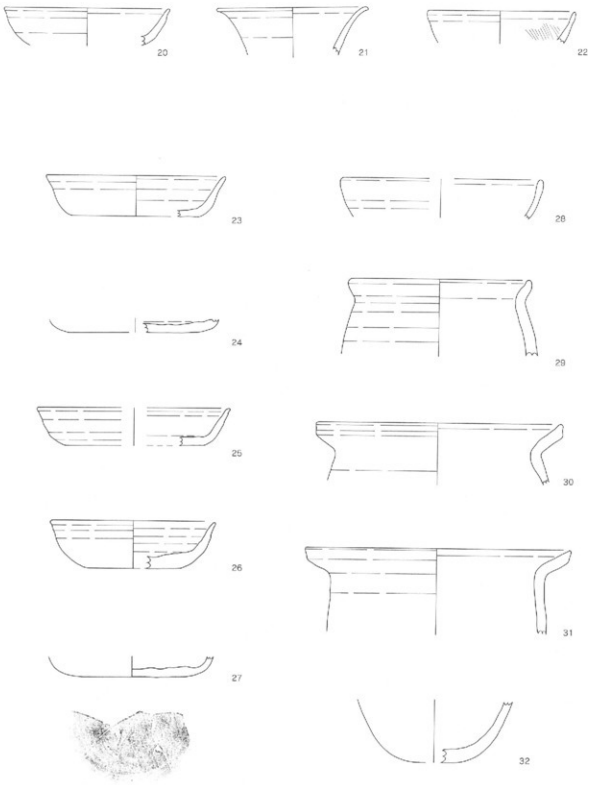
第30図　遺構実測図　平行溝群A・B（1/200・1/40）



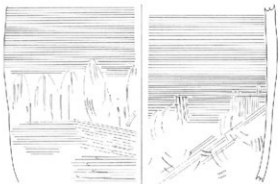
第31図　遺物実測図(1)（1/3）

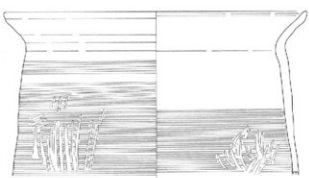


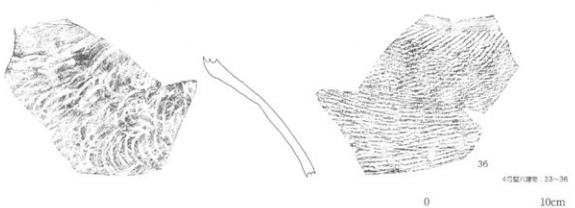
第32図　遺物実測図(2)（1/3）



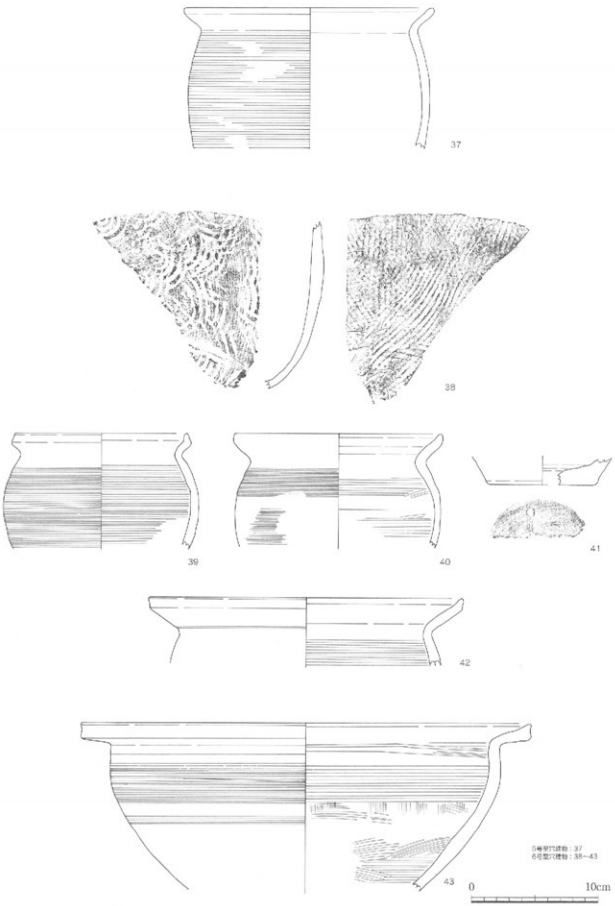
第33図　遺物実測図(3)（1/3）



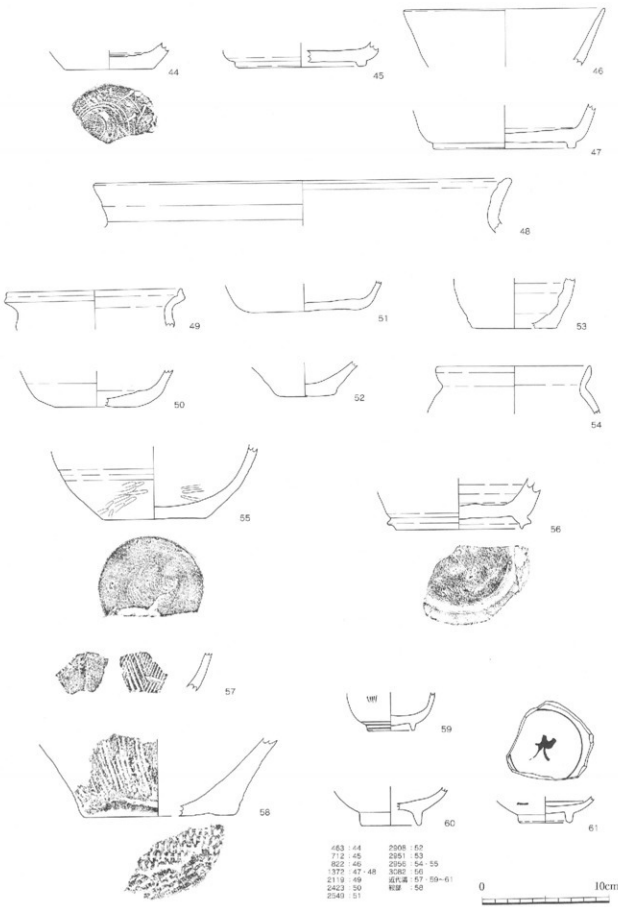




第34図　遺物実測図(4)（1/3）



第35図　遺物実測図(5)（1/3）



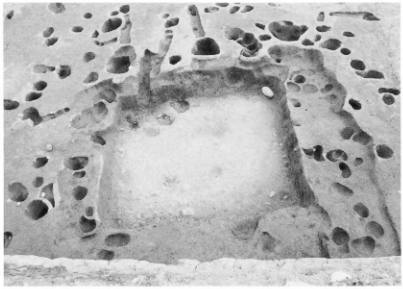
第36図　遺物実測図(6)（1/3）

第37図　遺物実測図(7)（1/3）

調査区北側全景（南から）

調査区南側全景（北から）

調査区西側全景（北西から）



1・4号竪穴建物完堀（北から）

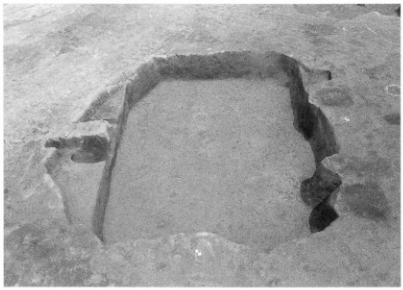
1・4号竪穴建物土層断面（南から）

4号竪穴建物カマド（北から）

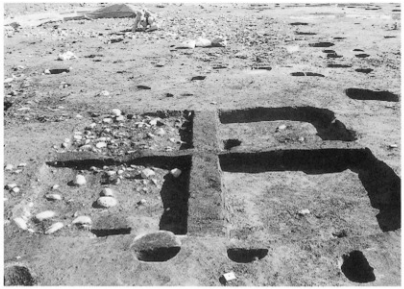
2号竪穴建物貼床面(北から)

2号竪穴建物完堀(北から)

3号竪穴建物貼床面(南から)



3号竪穴建物完堀(南から)



5号竪穴建物貼床面(北から)

5号竪穴建物完堀(西から)

6号竪穴建物貼床面(北から)

6号竪穴建物遺物(43)出土状況

6号竪穴建物完堀(北から)

7号竪穴建物完堀(東から)

1号堀立柱建物完堀(南から)

2号堀立柱建物完堀(北から)

3号堀立柱建物完堀(北から)

1·3·4号竪穴建物·1号堀立柱建物(北から)

4号竪穴建物·2号堀立柱建物(北から)

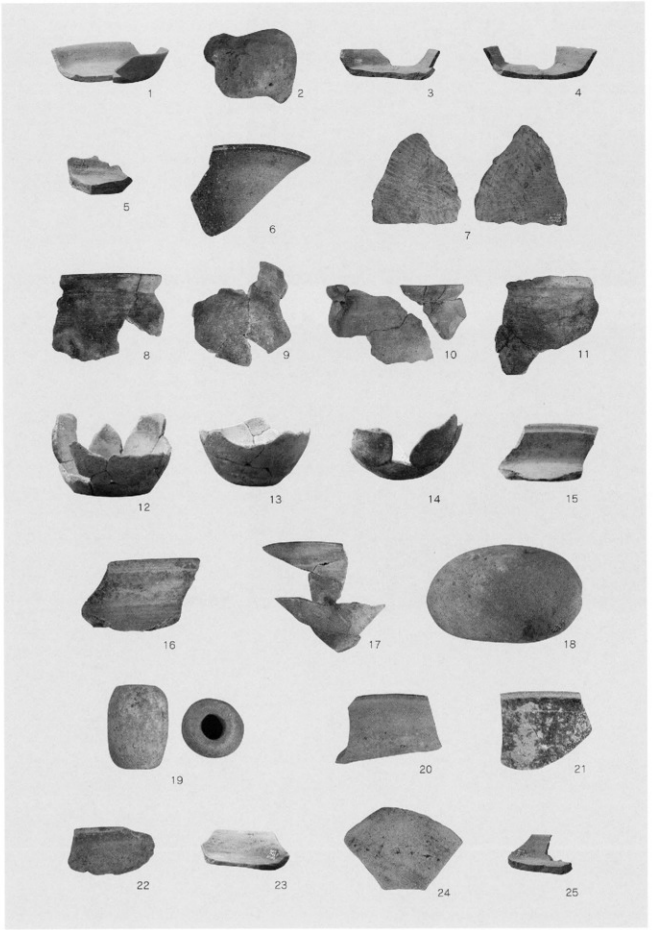
土坑2081完堀(南東から)

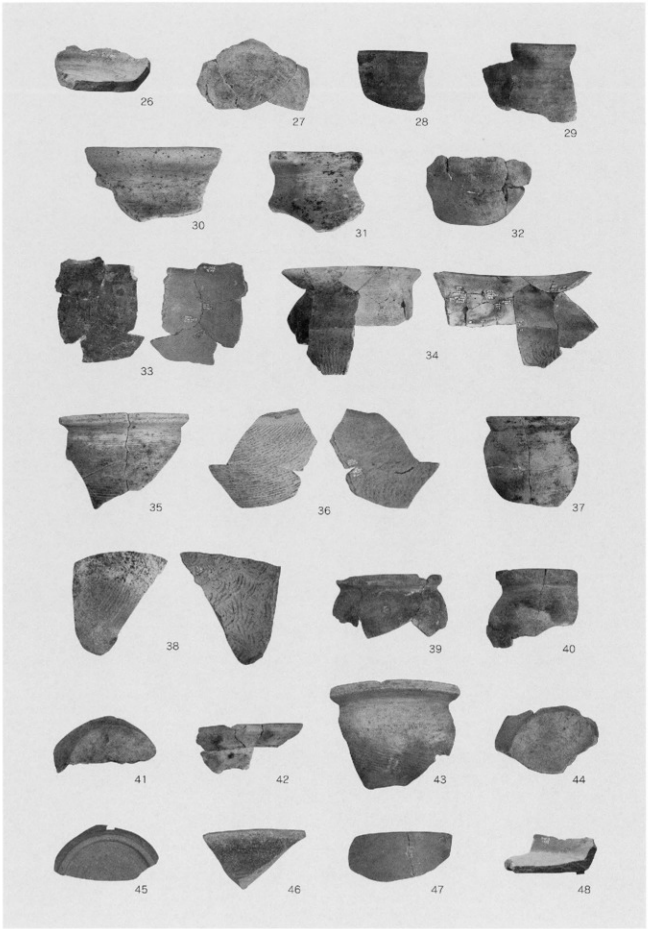
土坑2102完堀(南東から)

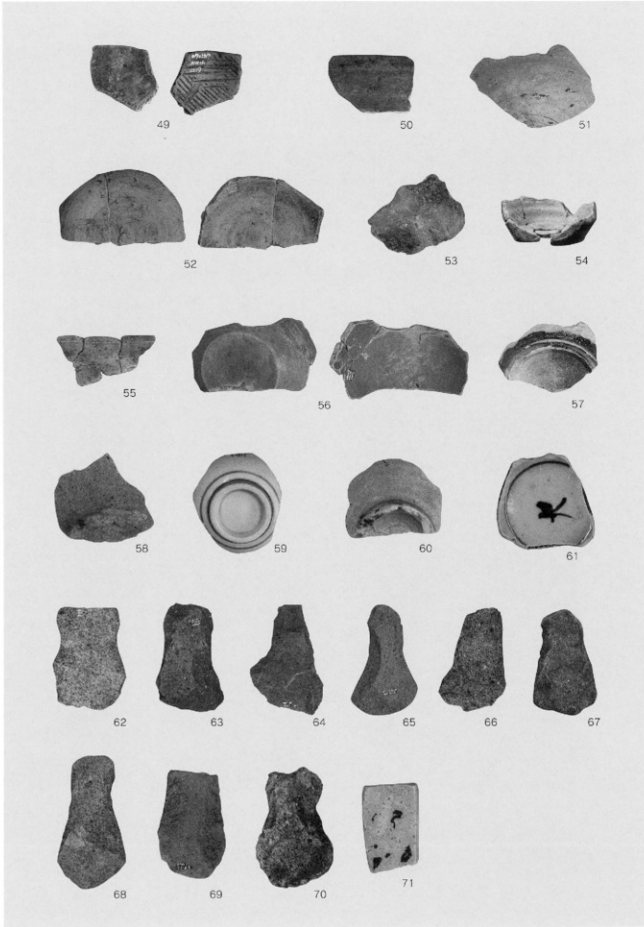
道路状遺構(東から)

溝2571・2957(北から)

平行溝群A(北から)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48


49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71

報告書抄録

ふりがな	あわだいせき
書名	粟田遺跡
副書名	津田駒工業株式会社野々市工場増築用地に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	水野　勝章
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	〒921－8510　石川県石川郡野々市町三納18街区1　　Tel：076－227－6122
発行機関	津田駒工業株式会社・野々市町教育委員会
発行年月日	西暦　2009年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
粟田遺跡（あわだ）	野々市町（ののいちまち）粟田（あわだ）	17344	16008	36度30分30秒	136度20分30秒	20070416～20071218	6,026	工場施設増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
粟田遺跡	集落跡	縄文、古代	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、道路状遺構	須恵器、土師器、石器	

要約

古代の集落跡を確認した。調査区の西側は自然の谷地形が南北に伸びている。既往の調査によって東側にも南北に伸びる谷地形を確認しており、集落跡は谷と谷の間にある微高地上に位置している。集落跡には竪穴住居と掘立柱建物が数棟ずつ点在し、その周辺には耕作地の広がる散居村的な様相を呈している。

津田駒工業株式会社野々市工場増築用地に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

粟田遺跡（第16次調査）

発行日　平成21年3月31日
発行者　野々市町教育委員会
〒921－8510
石川県石川郡野々市町三納18街区1
電話　076－227－6122
bunka@town.nonoichi.lg.jp
印　刷　前田印刷（株）